

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

第7回 いま、フランスの子どもの本は？

平成25年11月16日（土）

第1部講師 河野万里子氏（翻訳家、上智大学非常勤講師）

第2部講師 コリーヌ・カンタン氏（フランス著作権事務所代表取締役）

平成25年11月16日、国際子ども図書館において、「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第7回として「いま、フランスの子どもの本は？」と題する講演会を行いました。

第1部は、河野万里子氏に、御自身が翻訳した本を中心として「とてもフランスらしい本」、「国境や海を越えて読まれている本」、「フランス人が好きな自然を扱った本」、「伝記の新訳や名作を絵本化した本」を紹介していただきました。

まず、「とてもフランスらしい本」として、サン＝テグジュペリ作『星の王子さま』を挙げました。この作品は子どもの向けの本として書かれましたが、子ども・大人といった枠を超え、むしろ大人が、それまでの人生経験等々を投影しながら、愛や孤独、死や生きる意味といった作者の思いやメッセージを感じ、読み継ぐ物語ではないかと述べました。

ほかには、祖父に対する「うそ」を題材に、家族の在り方や祖父の死などを描いた『水曜日のうそ』、ひねりの効いたユーモアで、生きることや愛について描いた『秘密の手紙 0から10』、絵本からは、フランスらしい詩情をたたえた『窓辺の鳩』、『南仏の光、イタリアの風』を紹介しました。

次に、「国境や海を越えて読まれている本」として、猫やカモメを主人公とし、主義主張・文化・種の違いを越え、それぞれが自分らしく生きる様を描き、ヨーロッパでベストセラーになった『カモメに飛ぶことを教えた猫』、ハムスターの女の子から見た日常を描いた、人気絵本シリーズ『だいすきっていいたくて』、同じ作者による『なにがほしいの、おうじさま？』、クリスマスまでの24日分のお話が収められていて、絵本の中のクリスマスツリーにつける紙の飾りがページごとについているアドベント絵本『こぐまのクリスマス：クリスマスをまつ24のおはなし』、クリスマス向けながらフランスらしい陰影のある『ちいさなもみのき』が紹介されました。

続いて、「フランス人が大好きな自然を扱ったもの」、「伝記の新訳や名作を絵本化したもの」を具体的な作品を挙げて紹介しました。

加えて、こういった作品が生まれてきた背景であるフランスにおける児童文学の歴史に

ついて、17世紀から作品に沿って概説していただきました。道徳・教訓的なものとして書かれた時代、冒険物語の時代、そして普仏戦争・産業革命・第一次世界大戦、第二次世界大戦と、それぞれ社会状況を反映した作品が生み出されます。その後、1966年に起きた「五月革命」といわれるフランス社会の文化的転換、そしてフランスの義務教育の16歳までの延長などを経て、現在では年齢別に様々な本が出版されるようになり、死・愛・性・戦争といったテーマもありのままに子どもたちに伝えようとする流れが生まれたそうです。

第2部は、「フランスの子どもの本の現状」をテーマとして、コリーヌ・カンタン氏にお話いただきました。

カンタン氏によれば、フランスにおける児童書の簡単な定義は、大きく3種類に分けられ、0歳～6歳までの絵本など、フィクションと呼ばれる5、6歳からの本、そして百科事典、実用書などが含まれるドキュメンタリーというように分類されています。

フランスの本全体の売り上げの中で児童書は約14%を占め、ここ数年ずっと売り上げが伸びていましたが、2011年、2012年は少し下がってきています。2012年の数字ですと、売り上げは7%減、冊数では3.6%減です。中でも、乳幼児向けの本が最も減少しており、ドキュメンタリーの本は10%くらい減少しています。フランスの出版業界では、バンドデシネと呼ばれる漫画、コミックが一番伸びています。漫画、コミックを含まない児童書の総合売上げは年間503億円になっています。毎年、新作・再版を含め約1万4,700タイトルが出版されていますが、タイトル数は増えても各タイトルの売上数が減っています。

フランスの出版業界の大きな助けになっているのは版權を売り、外国で翻訳・出版する分野で、どんな小さな出版社でも、本を作る際は、フランスやフランス語圏の市場だけではなく、外国での出版を考えています。版權の売買実績は毎年増えており、2012年は3%くらい売上げを伸ばし、2013年は7%になっています。

また、出版業界で、本のプロモーションの方法の一つに、パリのサロン・ド・リーブル、モントルイユ市の、児童書のサロン・ド・リーブル・ジュネスといったブックフェアが開催されていること、また、児童文学賞も多くあることなどが紹介されました。

次に、子どもたちの読書に関する傾向についてお話があり、統計では、少なくとも週に1回本を読むという子どもは全体の56%、うち毎日読むという子どもは28%、読まない又は一切読まないという子どもは14%という状況だそうです。親の半分近くが、子どもの読書時間が足りない、自分の子どもにはもっと本を読んでもほしいと不満を感じているそうです。

その他、フランス出版業界の10年くらい前からの好況の要因の一つとして、児童書の分野で、子ども向けとは限らないイラストを中心とした本が増え、それまではどこにも分類できなかった、新しい本が児童書の分野で出版されるようになったことを挙げました。これによって業界は活気付き、作者・編集者による制作も販売も国を越えて国際的になりました。国内外にアピールして外国の出版社に売ることを念頭に置き、国際的なブックフェアへの出展、ホームページへの英語カタログの掲載などを行っているそうです。

また、日本語で出版された最近のフランスの本として、乳幼児向けの『まるまるまるの本』、ドキュメンタリーの『もののしくみ大図鑑：どうやって動くの?：電球からロケットまで 250 点のもののしくみがよくわかる!』、フィクションの『ペギー・スー』シリーズ、中学・高校向けの『哲学のおやつ』、『ニノン』、デザインを中心にした本として、『ナマケモノのいる森で』、子ども向けの美術誌『ダダ』などの特色ある本が紹介されました。

最後に、フランスで最近出版された日本の本として、グラフィックに特徴のある本、日本の童話をフランス人が書いて、日本人の画家が絵をつけた本などについても紹介されました。さらに、日本人が思う以上にフランスでは日本への関心が高まっており、従来のような川端康成や三島由紀夫といった著名な文学作品だけでなく、今は子どもから大人まで、日本の料理、デザイン、建築、美術へと関心は広がっていること、そして最も関心が高いのはやはり漫画であるという状況を紹介して、講演は終了しました。